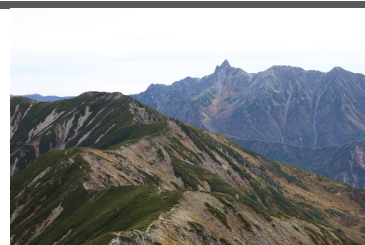


日本百名山 登山日記

歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です

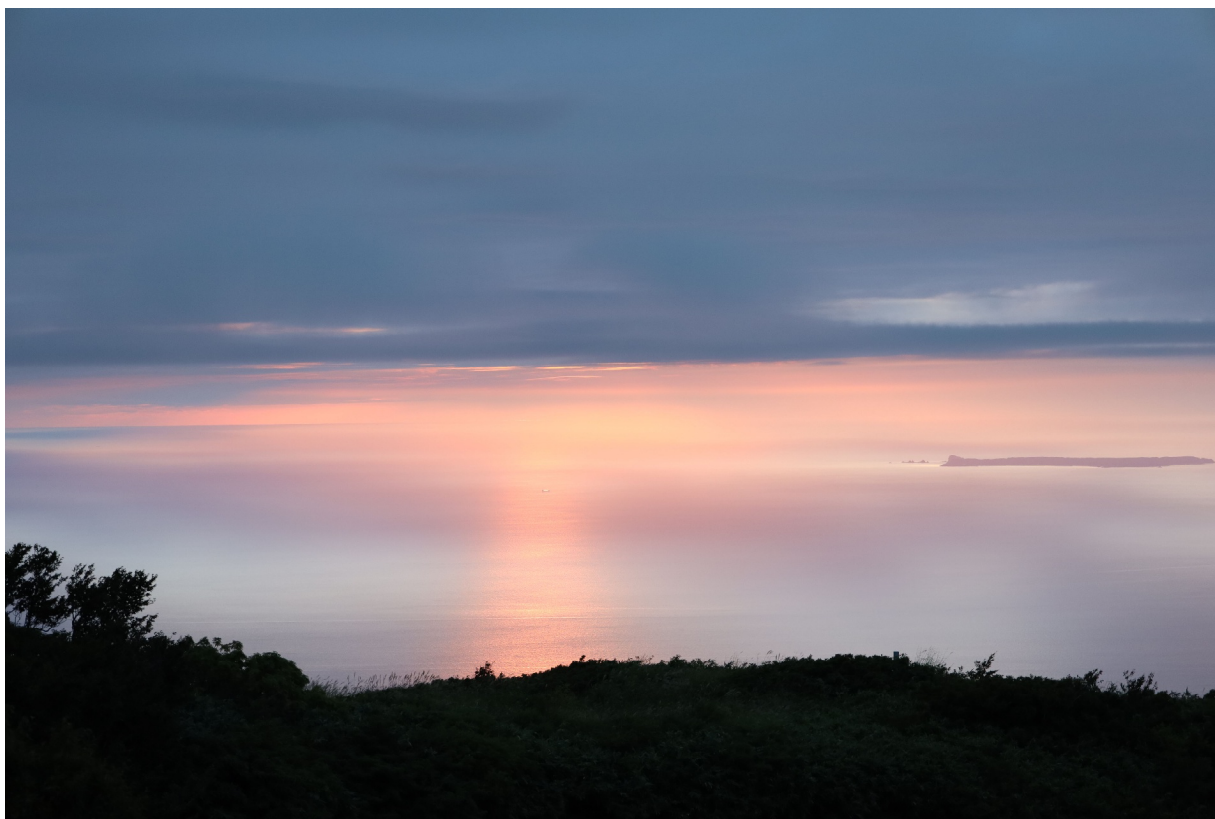


vol.35 月山(日本百名山 44/100), 鳥海山(日本百名山 45/100)

山に登るなら、気象条件の良い時が良い。せっかく登るのですから、ご褒美に山頂からの素晴らしい景色を心に刻みたいものです。但し、いくら麓が晴れていても、山頂はあいにくの天気という事はしばしばあり、またその逆もあります。

登山は天気との戦いであり、真夏でも高山であればちょっとした天候の変化で命を危険に晒すことも十分にあります。ですから、身を守るためには天候の安定した日に山に登る、これが一番です。

とはいいながら、週末が必ず良い天気とは限りません。そんな時はどうするか？日本は広いんです。要するに、雨の降らない地域に行って登ればよいのです。但し、日本百名山を進めていくにあたって、どんどん行ける山域が少なくなるのでその手法も使えなくなっているのですが、それでもせっかくの連休は山に行きたい。今回の登山実施にあたり4パターンの詳細登山計画策定し、前日まで天気予報とにらめっこ、結局、雨雲から最も遠いであろう山形県および秋田県へ遠征する事にしました。毎回のコラムにも書いていますが、さすがに車移動で秋田県の最南端と言えど遠い、移動時間は片道16時間、距離1,300kmとなります。但し、高速道路や交通量の少ない区間の国道7号線をのんびり走れるので、狭い山道を長時間走る事に比べれば、体力的、精神的には遥かに楽な移動です。また、北関東に住んでいた時に新潟県新発田市から村上市、山形県鶴岡市付近にはドライブに行った事があるので、記憶の片隅に薄っすらとある風景を「今」と重ねる楽しい山行でもありました。



鳥海山 鉾立登山口駐車場から見る日本海に沈む夕日と飛島

さて、今回登った月山と鳥海山を紹介します。

月山（標高1,984m）は山形県の中央に位置し、出羽三山の最高峰となります。出羽三山とは羽黒山、月山、湯殿山の総称で江戸時代までは神仏習合の権現を祀る修験道の山であったそうです。

明治以降は神山となり、羽黒山は稲倉魂命、月山は月読命、湯殿山は大山祇命、大国主命、少彦名命の三神を祀っています。羽黒山は現世の幸せを祈る山（現在）、月山は死後の安楽と往生を祈る山（過去）、湯殿山は生まれかわりを祈る山（未来）とされており、出羽三山への参拝は、江戸時代には庶民の間で、現在・過去・未来を巡る「生まれかわりの旅」として広がったそうです。

尚、冬季は月山、湯殿山には積雪で登拝できないため、羽黒山に三神を祀られています(三神合祭殿)。

深田久弥は、著書 日本百名山で月山をこう記しています。「みちのくの 出羽のくにに三山は ふるさとの山 恋しくもあるか」 斎藤茂吉のみならず、山形県人は皆そう感じるに違いない。中略、ひとり月山だけが優しく高く立っている。優しく、それが月山である。北の鳥海の鋭い金字塔と対照するようにそれは優しい。

さて、もう一つの百名山である鳥海山（標高2,236m）は山形県と秋田県の県境に位置しています。日本海の海拔0メートルから標高2,236mの高さまで立ち上がる珍しい山で、凜とそびえる気高い姿は富士山になぞらえて「出羽富士」と呼ばれ、雪を頂いた秀麗な姿が今も昔も人々に愛されているそうです。また、鳥海山は有史以降多くの噴火記録がある活火山でもあり、外輪山の風景も含め火山の山特有の激しさも感じさせてくれ、特に山頂付近の岩場は独特の景観を呈しています。

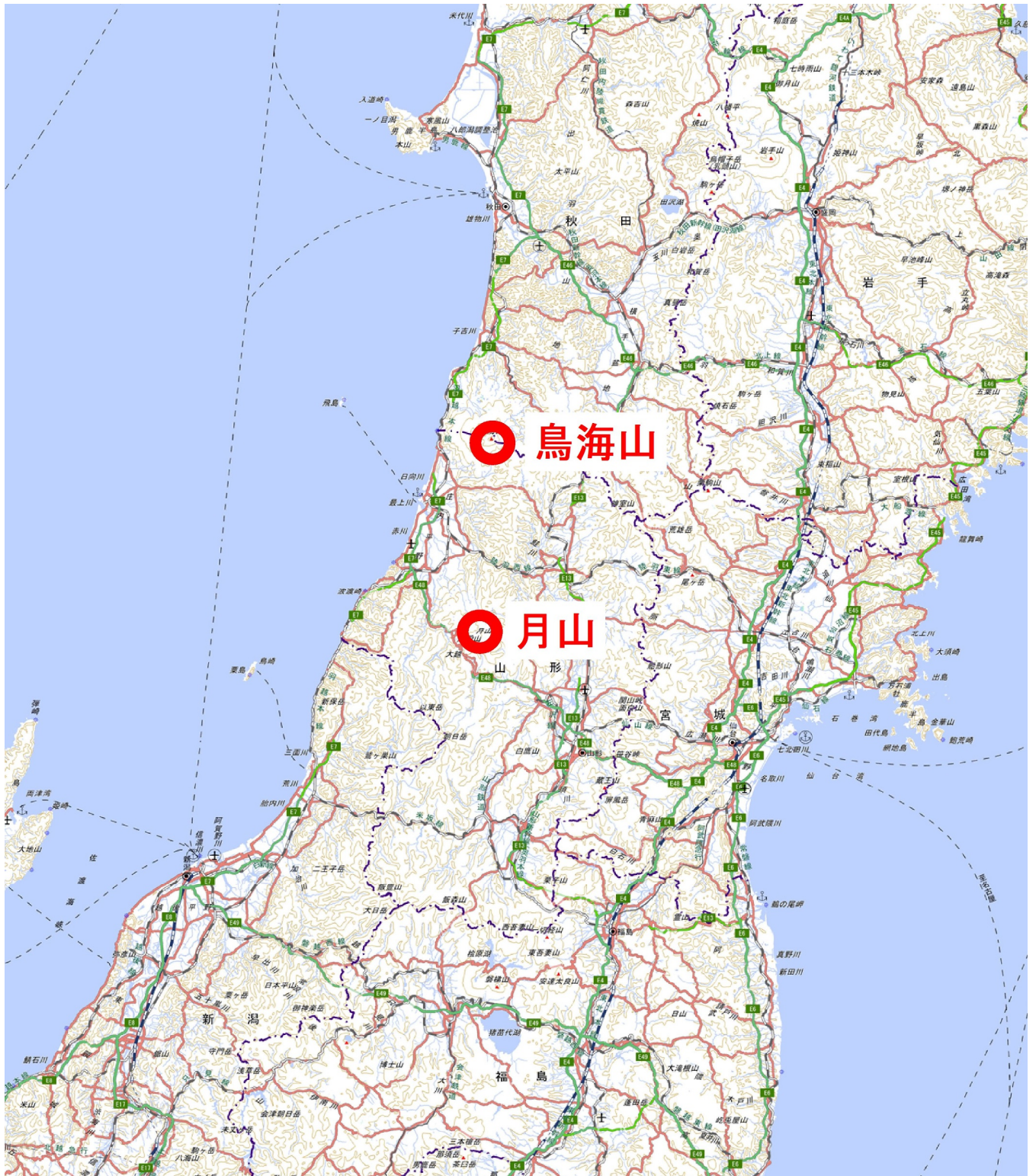
先の日本百名山の一文の中で、月山とは対照的な山とされた鳥海山ですが、深田久弥は以下のように記しています。

名山と呼ばれるにはいろいろな見地があるが、山容秀麗という資格では、鳥海山は他に落ちない。目路限りなく広がった庄内平野の北の果てに、毅然とそびえ立ったこの山を眺めると、昔から東北第一の名峰とあがめられてきたことも納得出来る。中略、標高は東北の最高峰とは言え、わが国の中部に持ってくると、決してその高さを誇るわけにはいかぬ。しかし、その高さは海ぎわから盛り上がっている。山の裾は海に没している。つまりわれわれはその足元から直ちに二二四〇米を仰ぐのであるから、これは信州で日本アルプスを仰ぐのに劣らない。

「ここにして 浪の上なるみちのくの 鳥海山はやけき山ぞ」 斎藤茂吉 日本百名山より原文まま



月山を下山後、時間があつたので羽黒山を訪れました 出羽神社(三神合祭殿)



出典:ヤママップ地図

では、今回の山行についてです。

今回も天候による自由度を最優先し、車中泊での計画としました。最終的には頸城山塊の妙高山および火打山の縦走とギリギリまで悩みましたが、頸城山塊なら二泊三日で十分に行ける場所なので、思い切ってそこからプラス4時間の月山を目指すことにしました。

実は当初、スケジュール的に早く帰宅できるということから、鳥海山を先に登る予定としていたのですが、翌日の天候が雨という事で、滑落等の万が一の事故を避けるため、難易度が低く安全に登山が出来る月山を荒天対応として登る事にしました。

登山口までのルートはいつも通り山陽道から舞鶴若狭道経由、北陸道で向かいます。新潟県の北部にある村上市で北陸道は一旦途切れ、ここからは国道7号線を北上、途中、美しい日本海を見ながら鶴岡市に入ります。この海沿いの風景で、約30年前の記憶と合致した箇所があり、思わず顔がほころんでしまいました。

鶴岡市内のコンビニで晩ご飯と翌日の食料を調達して19時少し前、無事に八合目登山口駐車場に到着です。駐車場には既に20台以上の車が駐車しており、中にはバーベキューをしている人もいます。自分もすぐに晩ご飯を食べ、車中泊の準備をしようとしたところ、いきなりの土砂降り。さあ、明日の天気はいったいどうなるのか？悩んでも仕方ないですし、長時間の運転で疲れていたのととりあえず寝ます。

翌日は午前4時に起床、天気は微妙ですが雨は上がっています。雨雲レーダーを見ると、本格的に降り始めるのは午前10時過ぎ、ハイキングコースレベルの月山ですので、距離は10km以上とありますが5時にスタートしペースを少し上げれば9時頃には十分に下山できる予定です。



月山 登山データ：距離 10.5km 累積標高上り 627m 登山区分 日帰り (ヤママップのデータを転記)

という事で、朝食を摂り準備を整え5時6分にスタートします。ここ最近、熊の目撃情報もあったので、本音は一番にスタート（しかもブラックスタート）はしたくはなかったのですが、いつもの事なので登山靴を履きザックを背負うとスイッチオン、気にせずスタートします。

しかし、スタートして5分で問題が。なんと、いきなりの土砂降り。車に戻ろうかとも思いましたが、車の中がびしゃびしゃになるのも嫌なので、そこですぐに合羽を着てザックカバーを装着、雨対策をし登山を継続することにしました。ちなみにこの時点では、まだ十分な目視が出来ない薄暗い時間帯です。野生動物との遭遇も覚悟の上、雨で視界が悪くまた雨音で状況が分かりにくい中、神経を尖らしながら登ったことは言うまでもありません。



さて、行きますか…土砂降り



雨は降ったりやんだり



周囲の景色も楽しめず佛生池小屋に到着



晴れていれば美しい景色が拝めたはず

但し、月山は本当にハイキングの山、山頂までの勾配は125m/km程度と緩々です。雨具を脱いだり着たりを繰り返しながらの登山でしたので、そこまでスピードを上げることは出来ませんでした、約2時間後、無事に山頂へ到着、ここまで誰にも出会わず、しかも辺りは真っ白。

花の百名山である月山ですが、紅葉時期は綺麗なんだろうな～程度の雰囲気しか得ることが出来ませんでした。

下山を開始し約30分、雨は完全に止んでました。このころから、上ってくる登山者とすれ違うようになり、もう少しゆっくりと登山をスタートをすれば良かったと少し後悔。天気予報に文句を言っても仕方ないので、これも登山と割り切ります。

雨水が川のように流れる登山道を下りながら午前9時、無事に登山口に到着しました。



山頂にある山小屋には宿泊客あり



月山 山頂に無事に到着

さて、雨で冷えた身体には温泉です。午前中から温泉に入っのんびり出来る幸せ、これはこれで満足度は高いです。

温泉に入った後、隣接する店舗に美味しそうな葡萄が売ってあったので思わず購入、ここは葡萄の産地の山形県、安い！レジに持って行き、このままで食べれるか、洗った方が良いか、車で移動しながら食べたいのだからと相談すると、レジのおばちゃんは、親切にも洗ってくれ、車で食べやすいようにと小さなトレーにまで入れてくれました。

この時点で、山形県、大好きです。しかも、葡萄がめちゃくちゃ美味しかった。さて、鳥海山の駐車場に向かうには少し早かったので、付近の景勝地を少し巡り、夕食を摂ることにしました。

鳥海山の登山口は、鳥海ブルーラインを登った場所にあり、観光地と化していて駐車場や山荘が立ち並んでいます。

標高は約1,150mで、登山口からこれほどまでに海が一望できる百名山は他にないのではないのでしょうか？それだけ鳥海山は海の真横から一気に2,200mまでそそり立つ火山だと言えます。

本日は、この駐車場で車中泊をします。

翌日は4時に起床、朝食を摂っていると、登山者の車が一瞬で広い駐車場を埋めていきます。

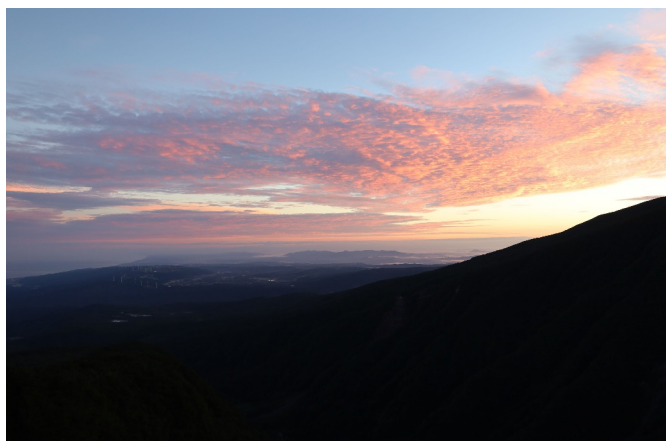
さすが、人気の百名山、実際下山した後には駐車場に入りきれなかった車が、路駐をしていました。

鉾立登山口を5時34分に出発、昨日の月山とは打って違って、登山道は既に登山者の列で渋滞気味。

途中の御浜小屋までの約3.4kmはガラガラと登る石畳のハイキングロードです。ただし、天気はあいにくの曇り空で、山頂方向を見るとガスっています。しかしながら、天気予報では9時過ぎには晴れるようでしたので、それを楽しみに歩みを進めることにしました。



登山日の早朝、既に登山者は活動しています



朝焼けの牡鹿半島方面と日本海



鳥海山 登山データ：距離 14.5km 累積標高上り 1,355m 登山区分 日帰り (ヤママップのデータを転記)



右奥の登山口からスタートです



スタート直後からガスで真っ白

午前6時50分、渋滞に悩まされながら御浜小屋に到着です。帰路に気付いたのですが、ここまでハイキングで来て戻られる人がかなりいたように思います。

但し、この時間帯はそんな生易しいものではなく、ガスガスで爆風、ここまでは半袖で上ってきていたのですが、あまりの寒さにソフトシェルを着て防寒します。

さて、ここからは少し歩き扇子森を越えると外輪山の縁を上る本格的な登山道となります。

七五三掛(しめかけ) からはコースは二つに分かれ、外輪山を通るコースと千蛇ヶ谷を進むコースとなり、上りは千蛇ヶ谷コースを選択(北側のコース)、理由は単純に山頂からの下山時に再び上り返したくないからです。



御浜小屋を過ぎるといきなり暴風、一気に体温低下



扇子森への上り、終始ガスガスの昨日がよぎる

千蛇ヶ谷コースに入るとすぐ、一気に沢筋まで下りていきます。そこは、9月後半というのに雪渓がわずかですが残っていました。標高が低いにも関わらず雪が残っているのは、さすが豪雪地帯の山です。

ここからは段々と勾配が厳しくなっていきますが、登山道は整備されており、特に危険箇所はありません。快調に標高を上げていくのですが、まだまだ周囲はガスに覆われています。しかしながら、山頂直下、鳥海山大物忌神社に差し掛かると、雲は晴れ一気に青空が広がります。

周囲の登山者からも「おっー」と歓声が上がります。



千蛇ヶ谷コースに下ります



鳥海山大物忌神社まであと少し



すると一気にガスが取れてきます



鳥海山大物忌神社、みなさん休憩していました

ここで少し休憩し、いよいよ山頂に向けて岩場を進みます。と言っても、ルートはやや不明瞭なもの（と言うより、選択枝が多数）難易度はそれほど高くなく、また足元は十分にグリップが効くので、ガンガン登っていきます。

9時20分、前半の渋滞と休憩で予想よりも若干時間がかかりましたが、無事に鳥海山山頂（新山）に登頂しました。



目の前の岩場を登れば山頂



楽しい岩場、一気にスピードアップ



振り返って、赤い屋根が鳥海山大物忌神社



楽しすぎてたまらん



岩の隙間も通過していきます



鳥海山（新山）山頂

ここからの風景は絶景、この標高から見る海は格別です。また、美しい青空と相まって、もう言葉がありません。

山頂で写真撮影し、そこからは、外輪山に向かう為に大きく下ります。ザレ場に出るまでのルートも上りと同じくゴロゴロ岩場の迷路で、アスレチック感覚で楽しめます。

さて、そこを抜け滑りやすいザレ場を下りきると、そこからは外輪山への上り返しとなりますが、標高差は50m程度とわずか、すぐに上り切ります。外輪山から振り返った山頂の姿は見事、荒々しくも凜として風格ある佇まいです。



標高2,200mから見る海は新鮮



日本海と庄内平野



秋田方面、男鹿半島が見えます



上りに通過した岩の隙間



下山路もまた楽しい



外輪山を目指してガレ場を下ります

ただ、この頃より一気にガスが山腹斜面を駆け上がってきて、あっという間に周囲は真っ白、この後、晴れることはありませんでした。



外輪山より振り返って新山山頂



見納めです、ここから一気にガスで真っ白



登山道もガスで覆われてきます



登山口手前の展望台より、山頂は雲の中

しかしながら、山頂付近で綺麗に晴れ渡るという最高の時間を過ごせたことで、満足感一杯のまま下山を開始しました。

13時30分少し前、鉾立登山口に到着。

鳥海山の美しい裾野が広がる風景に後ろ髪をひかれながら、日帰り温泉で汗を流し、途中、高速道路のサービスエリアで車中泊して自宅へと無事に帰ってきました。

今回の山行では、月山はあいにくの天気で残念でしたが、鳥海山は天気にも恵まれて良い登山が出来ました。登山は、天候に一喜一憂する趣味であり、またその天候により簡単に命を落とす危険もありますが、それを差し引いても有り余る感動を与えてくれます。

但し、この文章を書いているこの瞬間にも、命を落としている人がいるかもしれません。最近では、那須朝日岳での4名遭難死亡事故（低体温症）、戸隠山の滑落死亡事故、新穂高から槍ヶ岳へ向かう飛騨乗越での女性単独登山者の凍死、また無事に救出されホッとしましたが、北アルプス三俣蓮華岳での遭難（1名は自力下山、もう1名は野口五郎岳の西側の東沢谷内で救助）など、登山に関わる痛ましい事故が続いています。また、熊による人的被害も過去に例がないほど頻繁に起こっている事から、私自身も気を引き締めて、安全第一に登山を続けていきたいと思っています。